放送大学島根学習センター開設２０周年記念公開講演会２

松江藩主・松平治郷の功績「財政再建と茶の湯文化の振興」

平成２８年１１月１２日（土）１５：４５～
会　場　島根県立美術館ホール
講　師　藤間　寛（島根県立美術館学芸専門官・松江歴史館学芸専門監）

本日は不昧公の財政再建とそれをもとにどういうふうにお茶の文化を築いたかそういったところを話します。お茶の文化というか不昧公のお茶を語ることは、歴史以外に茶道史、茶道具、お手前の三つ研究しないと結論はでないので至難の技であり難しいことである。今日は歴史面からせめて見たいと思います。松平治郷、一般に不昧公といわれていますが、1751～1818 年に 17 歳で松江藩 7 代藩主になり、56 歳で隠居し不昧と称して品川大崎の御殿山の下屋敷でお茶の世界を楽しんだ。不昧公の時代はどんな時代であったかというと、全国には 270 藩あったが、一国一城の藩主は多くなくほとんどが城を持たない藩主であった。

松江藩は 18 万 6 千石で 25 番目の藩であった。なぜ、すばらしいお茶道具をコレクションするようになったかということが今日話をすることである。

時代は葛飾北斎、鈴木春信、応挙、若冲など自由な芸術文化が育ってきたころである。文化文政期は江戸文化が最も発展した時期である。そんな時代にあって松江藩の財政はどうであったか。数年前に上杉鷹山が脚光を浴びたが、そのとき松平不昧も財政をたてなおした名君だったという話題がでたのですが、不昧の時代には約 50 万両の借財があったと言われています。年間予算は 13 万～16 万両と言われていますから、ほぼ 3 年～4 年分の借財を藩が抱えていたわけです。どうやって清算していくのかというと、実は不昧公のお父さん松平宗衍（むねのぶ）が、まず延享の改革（御直捌）を老中の小田切備中を雇用して出直そうとします。しかし、うまくいかない。そこで松平宗衍は 38 歳で藩主を退いて、不昧公にバトンタッチをすることになる。不昧公は 17 歳であったが、松平宗衍が後ろ盾となって、また家老の朝日丹波を配してやった。これが明和の改革（御立派の改革）をやり、成功して藩の財政がたてなおった。この不昧公の改革の記録が残っている。それが「出入捷覧」で国の国文学資研究料館にある。いわゆる収入と支出が年毎に綴ったものであります。これによってどのように立ち直ったかが知れる。実際には天保 11 年、9 代藩主の時に約 50 万両を返済すことになる。一般的に 50 万両を返済するときにどうするかというと、松江藩の場合は踏み倒すことはせず、期限延長をやった。藩と豪商との信頼関係によるが、それで、見事に返済する。その改革の手法はどうかというと、人件費の削減、借金の不払い、藩への収入の確保。治水事業で稲作の増収。松江藩の特殊なものとして、専売事業①木苗方、②木実方、③ふそう方、④人参方、これが他藩と違い増収ができたもとです。

木苗方はハゼ蝋、薬用人参、木綿、煙草などを新作物の研究し、苗を取り仕切ることころ。木実方はロウの製造製品化するところ、ふそう方は鉄の販売と製品化するところです。松江藩は材料だけではなく製品化して付加価値をつけることをした。ちかくに製品工場を作り販売した。人参方は朝鮮人参を生産し販売した。主に中国に向けて販売した。陸路長崎や大阪へ運び中国商人へ販売した。これがかなりの収入になったらしい。ただし、相当

試行錯誤があったらしい。この収入が参勤交代の大きな経費をまかなう要素となった。それ以外の、木綿や和紙、畜産でもかなり儲かっています。木綿はかなり取れて三井との取引もある。財政が好転できた結果、藩の御金蔵のなかに 10 万両のたくわえができた。

人口は全国で減るなかで、出雲の国は 23 万 5 千から文化 14 年には 30 万人強になった。石高は江戸のはじめに各藩の石高を決めたわけですが、その後農地の拡大や技術が進んで実質はどの藩も大きく収入があったようです。松江藩では実際は 38 万石くらいあったと言われています。財政再建は他藩でもあったわけです。薩摩の島津藩は不昧公が生まれたころは 66 万両の負債をもっていて、文政 10 年くらいには 500 万両という負債を抱えていた。最後は明治の新政府がそれを補う。熊本の細川家も 40 万両の借金があった。いずれの藩も借金をしていた。どうしたかというと、薩摩藩では琉球との密貿易、砂糖で収入を得ていた。その中で不昧公が生きた時代は苦しい小藩の藩主たちが、蘭学や科学、動植物の研究をしている。前田の加賀藩では、工芸美術の収集、鍋島藩では科学の分野に、島津ではガラスやガス灯をいち早くやっている。そうしたなかで不昧公はお茶の文化に向いたと解釈している。とかく、藩が潤ったお金を自分勝手にお茶道具に費やしたという話もあるが、それはそれとして、世の中の流れが大名がいろんなところに興味を持つ平和な時代でもあった。

茶道についての話ですが、なぜ不昧公が騒がれるのかが疑問になると思うが、理由は二つある。

まず、18 冊の「古今名物類聚」の本を自費出版した。ペンネームは「陶斎尚古老人」という。なぜ評価されたかというと、当時、藩財政の問題からお茶道具を手放す大名も出てくる、また江戸は火事や地震が多いため、名品がなくなってしまう。そのためせめて記録に残そうと始まったと前段に書いてある。研究することは不昧公だけはなく他にもいるが、1000 点くらいの記載があるが、ここまで詳しく残したのは不昧公だけである。これにより今日お茶道具研究に基本図書として使われている。茶道具研究の方法を示したものである。テキストに「名物は天下古今の名物にて一人一家一世の名物ならねば・・・」（後世に残すべしといっている）。

内容ですが、これは国宝の朝鮮の茶碗ですが、寸法、器物の景色を細かく記載、付属の布、内箱、外箱の様子を細かく記載、形状を書き記している。これは本来国や美術館がやるべき仕事を一大名がやっていることになる。今記載されたもののがこちらです。（画像による）

不昧公がなくなったあと京都の大徳寺のここ庵に奥さんが寄贈した。続いて、「雲集蔵帳」ですが、これは不昧公が所持したお茶道具の記録です。先ほどのもとの違って印刷して配ったものではない。蔵帳ですから内容が移動する場合もある。ほとんどが後世の写しである。確実性のあるのは県立美術館にあるものが、最後の蔵の蔵番方にあった帳面になります。「雲集蔵帳」の品は不昧公が 22 歳～68 歳まで 45 年間に収集したもので、約 924 点を集めた。

この中に国宝が 12 点、重要文化財が 15 点指定されている。今は松平家から分散して各美術館にあるが、この中を不昧公は七段階に分類している。貴重なものは宝物に分類しそれをさらに三段階に分類している。国宝の「園悟墨蹟」は、不昧公の遺言で最後まで松平家に残されていたものだが、昭和 13 年に帝室博物館に寄贈された。臨済禅で重要視されているのが「虚堂墨蹟」。唐物肩衝茶入「残月」は文化庁が 3 億円で購入している。不昧公の購入総額が 13 万両と言われている。130 億くらいと言われている。

その財源をどうしたのかというと、不昧公の小遣いを調べると、1800 両から 5800 両の使える金があった。福山藩主は 3000 両だったことから、べらぼーに高いとは言えない。ローンで購入した記録もあり、逝去後の借金残高が 1818 両あった。参勤交代に 3000 両～4000 両かかっていた。藩が再生再建したからこういうことができた。情報源は大阪江戸の有名な一流の美術商と付き合いがあったことがある。924 点が全部いいものではなかった。手に入れるにあたっては、一括購入などもやっていた。

「雲集蔵帳」が残っています。明治 22 年 7 月までは確実に蔵帳として使われたことが分かる。品川の隠居の時住んでいた、大崎のお茶室ですが 20000 坪の下屋敷にあった。ペリーが浦賀に来た時大砲の土塁の準備地となったところ。グリーンのところにお茶室を 11 個作った。住んでいたところに一番近いところにあったのが独楽庵で出雲伝承館に再現されています。下側にあるのが「雲集蔵帳」をしまった蔵です。虫干しの場所もある。ここまでして美術品を大事に扱おうとするのが不昧公のスタイルです。

道具については、不昧公は保存に気を遣っていて、保存が悪い場合は正目の木で自分で箱をを作ったり、箱に覆い紙を付けた。（松江の乃白の紙と言われる）。肌色っぽいものと灰色っぽいもの横線があるのが不昧公の好みものものといわれる。好みの紐を折らせて、更紗の風呂敷で包み札を付けることを徹底してやった。明名庵は家老の相澤家にあった。相澤家の一番端っこにあった。独立したお茶室ではなかったことが分かる。菅田庵が一番不昧公らしさをだしていると思われる。一帖と中板をつけたもの。不昧公の遺言になるが、不昧公が地元に残したものは、工芸品、食文化、お茶室、なと文化振興である。お茶文化をとおして地元の産業に役立てないかと考えたのでは。明治になって布志名の焼き物職人の育成をした、芸術食文化をとおした産業化を考えたのではないかと思います。

それから、学問の奨励をやっている。全国的に藩校が作られるが、松江においても宗衍の時作られ、不昧公のときに大きく発展する。明教館で儒学を、兵学や算術や医学をやり人を育てようとしたのではないかと思います。

不昧公の遺言が月照寺に所蔵されているが、先ほどの宝物は天下の名物、日本国の宝物である。自分が集めたものは自分のものではない国の宝物だ。あとは大事に使いなさいと言っている。号は浄土宗は嫌だ、小堀遠州の墓のある大徳寺孤篷庵に祭ってほしいと。これは不昧公の実子出羽殿はにあてたものです。

まとめてみると、当時の米本位の経済体制の中で、殖産興業で貨幣経済へもっていこうと施策を展開したのではないか。集められたものが今、分散しているが、少しでも出雲の地に残っていればと思います。再来年が没後 200 年になる。〔文責・石川直樹）